

に自分を客観視している意思力が独特である。

小さかりし笑顔を想ふははその母の日にさくらん
ば供へれば 篠田和香子

この作者の今月の五首には、すべてに枕詞が入っている。こは「ははそはの」。その他「あらがねの」「ささがねの」「あづさゆみ」「しなざかる」が出てくる。言葉遊び感覚でふだんは絶対に使うことのない古い言葉を使ってみる。これも作歌の楽しみの一つ。

おいおいと呼べばきちんと名を言えと娘に我は叱ら
れており 足立勝蔵

娘さんに叱られて嬉しそうである。まだ乳飲み子である双子の孫をうたった一連中の作。もしかしたら作者には双子の見分けがつかないのかもしれない。だから「おいおい」ですまそうとしたのかもしれない。

花ガスがぼんやり点る夕暮の明治の町は逢瀬を待つ
てゐる 塩川郁子

「花ガス」「逢瀬」を軸にしたレトロな空気。近代版画を見ての作だろうと読んだ。「花ガス」は明治期独特の飾りガス灯。私は実物を見たことがないが、ガス灯版ネオンサインのようなもので、広告に使われたらしい。明治時代の銀座の夜の空気感である。

昨日生まれし赤子の数を血の滲む分娩セットの数で
わが知る 高橋秀

医療器材を扱う仕事の現場の歌。出産は当事者にとつては大きな出来事だが、角度を変えてみればただの「数」なのである。あるいは逆に、この単なる「数」の一つ一

つが、一人一人の大切な人生と交点を持つ。出産セットがどういうものなのか私には分からないが、強く印象に残った一首。職場の歌をもっと作ってほしい。

「他人^ど人^ど井^どってどんな井？」無防備な身内の顔で夫は
訊ねる 濱田千春

「無防備な身内の顔」がなんとも可笑しい。ふだんとはちがう感じ、がじつにうまく表現されている。混雑しているシューウィンドウの前など、人がたくさんいる場所なのだろう。もちろん「夫婦は他人の集まり」という英語のことわざも意識されているだろう。なお、「他人井」は、関西発祥のもので、『広辞苑』には第六版から出ているという。

長田さんの作つた校歌 球児らはうたへり試合に勝
利した後 本田一弘

五月三日に七十五歳で他界した福島県出身の詩人・長田弘への挽歌。この作者の高校の先輩でもあつたらしい。思いを言うのではなく、事実を述べることで追悼の心を表現している。長田弘君（お互いに君づけで呼びあつていた）とは、いっしょに第七次「早稲田文学」の編集委員になり、三、四年の間、かならず毎月会って友人づきあひをするようになった。

細胞はほの明かりしてきみの見るナノ・メートルと
いふ単位はも 安田百合絵

相聞歌である。細胞そしてナノ・メートルという私たちの日常的レベルとは異なるスケールへのほのかな憧れ。「細胞はほの明かりして」が、うまい。